View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Tokushima University Institutional Repository

研究報告

突然の肉親との死別体験における悲嘆の回復過程に関する要因の分析
－スマトラ沖大地震・インド洋津波の被災家族の面接調査から－

近藤裕子[1)]，波川京子[2)]，山本加奈子[3)]，阿部朋子[4)]，
大利昌久[5)]，國井修[6)]，古賀才博[7)]，別所誠一[8)]，
門司和彦[6)]，錦織信幸[6)]，広瀬茂[9)]

[1)]徳島大学医学部保健学科
[2)]札幌医科大学保健医療学部看護学科
[3)]青森県立保健学部大学院生
[4)]長崎大学大学院生
[5)]日本医師会感染症危機管理対策委員
[6)]長崎大学熱帯医学研究所熱帯感染症研究センター
[7)]労働者健康福祉機構海外勤務健康管理センター
[8)]財団法人海外法人医療基金
[9)]おおり医院

要　旨　スマトラ沖大地震・インド洋津波によって，突然肉親と死別体験をもった２遺族に面接調査を行った．死別による悲嘆から回復する過程に，どのような要因が関連しているのかについて分析した．その結果，この地域が敬虔な仏教徒であったことから，対象となった２遺族は，信仰が悲しみを緩和する要因として働いていた．さらに近隣の人びとの精神的な支援や，新たな生命の誕生は将来への希望につながり，悲嘆から回復する要因の一つとなっていることが明らかとなった．

キーワード：スマトラ沖大地震・インド洋津波，死別体験，悲嘆，回復過程，面接調査

はじめに

身近な人との死別体験に対して，グリーフケアの重要性が多く報告されている[1－6)]．突然近親者との死別を体験した者に対する支援についての先行研究には，子どもを突然亡くした家族への支援[1－6)]，親と死別した子どもへの支援[7)]がある．成人期における突然の死別には，病気をはじめ事故の報告[8－11)]がされている．しかし，自然災害によって死別した肉親への精神的な支援の重要性は指摘されているものの，グリーフケアの過程に関する研究は少ない．

今回，筆者は昨年発生したスマトラ沖大地震・インド洋津波によって大きな被害を受けたスリランカに，被災地の復興状況の確認と，感染症発生の状況および，被災者の健康状態を調査することを目的とする日本医師会，長崎大学の調査隊の一員として参加した．被災後６カ月が経過したスリランカの一地域において，津波で突然肉親と死別した遺族に面接する機会を得た．面接の内容から，肉親を失った悲しみからどのように立ち直ろうとしているのか，悲しみの緩和にどのような要因が関わっているのかについて分析した．

目　的

突然発生した肉親との死別体験の悲しみから回復する過程には，どのような要因が関わっているのかについて明らかにし，今後の支援の一助とする．

方　法

１．対象

スリランカの南部に位置するイレーゴラ地区において，肉親が津波で死亡し，突然の死別を体験した42歳のＪさんと，42歳のＵさんである．２人とも母親を亡くした．

2006年１月５日受理
別刷請求先：近藤裕子，〒770-8509 徳島市蔵本町３-18-15
徳島大学医学部保健学科

2．期間

2005年6月24日と25日の2日間.

3．方法

イレーゴラ地区において津波で死亡した者は4名である．2名の遺族に対して，津波の状況から，家族をどのような状況で亡くしたのか，肉親との突然の死別体験からの回復過程について，現在の心境を語ってもらった．面接調査は現地の通訳を通して行い，話の内容で理解困難な箇所については，少し詳しく質問を追加した．

対象が語った内容を記述し，語った内容から被災6カ月後の心理と，悲しみからの回復過程について分析した．

4．倫理的配慮

対象の2遺族には通訳を介して調査内容について説明し，津波で死亡した家族のことと，死別後における心身の状態について話して欲しい旨を伝え承諾を得た．

津波による被災地の現状

津波によるスリランカの被害の一部はJNI4（1）[12]で報告した．

今回取り上げたイレーゴラ地区は，コロンボから南の都市であるゴールに近く，国道より少しはずれた海岸近くに位置している．この地区には55世帯の家族が居住している．訪問した当時は，殆どの家屋は津波で流出しており，鉄筋の家だけが外観あるいは土台部分を残した状態で残っていた．更地の跡には，板張りトタン屋根の仮設がフランスやドイツのNGOによって建設され，6畳ほどの土の上で家族が寝起きしている．飲み水は各人の家に設置されたタンクから供給されており，洗濯や水浴は破損を免れた水道によって行われていた．

津波で潮が遠くまで引き，異常を感じた者は海岸より遠くに避難したとのことであった．そのため，この地区での津波による死亡者は4名に止まった．死亡者は病気で身体の自由が利かなかった老人3名と生後3カ月の乳児である．

事例の紹介

ケース1　Jさんの場合

文章中にある「 」内は，対象者の語った内容を示しており，以下のケースも同様である．

Jさんは，漁師をしている43歳の夫と20歳と19歳の息子と18歳の娘，2.5ヵ月の娘の6人家族である．2.5ヵ月の娘は被災後に誕生している．津波襲来時，視覚障害者の70歳の母親が同居していたが，津波の犠牲者となった．

「津波時，目の悪い母親を連れて逃げ出したが，母親は逃げることができず波にさらわれ，死体でみつかった．突然に母親が亡くなったのでとても悲しく，毎日母親のことを思い出している．家族の中や，近所の人たちと生前の母親のことを話題にする事が多い．母親は目が見えなかったので，声で近所の人たち一人一人の区別がつく状態であった．近所の人から貰い物があれば，近所の子どもたちに全て分け与えるやさしい人であった．母親を亡くした悲しみを軽減するために寺に行きなさい，と近所の人は言ってくれる．お金がないため寺にあげるもの（お寺に供物や布施の風習がある）がないのは悲しい．身につけている金製品を売り，布施をしている状態である．近所の人もみんな被災して大変な状態であるので，助けてもらうことは難しい．6ヵ月過ぎて母親がいなくなった悲しみはだんだんと少なくなってきている.」

Jさんは，面接中でも笑い顔がみられたし，また，近隣の人と話している時にも明るい状況が観察された．

ケース2　Uさんの場合

Uさんは漁師をしている50歳の夫との二人暮らしである．子どもはいない．津波時，麻痺で寝たきりの母親と同居していたが，母親は波にさらわれて死亡した．

「津波襲来時，夫が母親を助けようとしたが，動かすことができず母親は波にのまれて，海の中に落ちていった．その日のうちに浜辺に遺体で発見された．

突然の母親との死別で，とても悲しくて毎日母のことを思い出している．近所の人と母親の話をしたりしている．1ヵ月に1回は寺に行き僧侶の話を聞いている．寺を訪問する時には僧侶に食物を提供している．寺に行くことによって気持ちが少しは楽になるが，悲しみは次第に深くなっている．身体的にも右第3指第2関節が腫脹し疼痛があるし，夜も津波が怖くて眠れない．夫は健康状態に問題はなく元気である.」

面接中Uさんは，眉間にしわを寄せ，笑い顔もなく，身体全体を悲しみが包んでいるような感じであった．

考　察

昨年発生したスマトラ島沖地震インド洋津波は，震源

地から遠く離れたスリランカの東部から南部の海岸線の地域に大きな被害を及ぼした．スリランカでは43,000人が死亡し，5,600人余りが行方不明，77,000世帯50万人が家を失った．スリランカはインドネシアに次いで死者，被災者が多い国であった[13,14]．

調査に入ったイレーゴラ地区は，海岸近くに位置していることから家屋は殆ど流出していたが，人的被害は4名の死亡に止まっていた．面接した2人は，家も被害を受けた上に，最愛の母親を失うという2重の喪失体験をしていた．2人とも6カ月経過しても母親のことは常に思い出して悲しいと言う．

この地区は敬虔な仏教徒の集落である．人々はBLESSING OF BUDDHAという言葉をよく使い，常にBUDDHAを敬い感謝する心が強い．Jさんは寺に参ることにより，母を亡くした悲しみから少しずつ立ち直っている．寺に参り布施を行い，BUDDHAを礼拝することにより，死者を敬い，自らの悲しみを昇華していると考える．さらに，集落の人々が共に支え合いながら生活しており，周囲の人々との良好な関係性を保っている．そして，死者の思い出を語り合うことなどにより，集落の全員で死別の悲しみを共有している．このような状況がカタルシスの機会となり，悲嘆の緩和につながっている．さらにJさんにとって新たに誕生した子どもの存在は，母の死という悲しみを緩和する大きな出来事となっている．Jさんの「悲しみは少しずつ緩和されている」という言葉からも，肉親の死の衝撃・葛藤・混乱を乗り越え，生きる力をみいだすための模索段階に入っていると判断できる．

他方Uさんは，夫と2人の生活の中で母親を失った悲しみから抜け出せない状況が見られる．母親を失い，以前の様な生活にいつ復帰できるか分からない現状の中で，Jさんと同様に周りの人々の支援やBUDDHAを礼拝し，死者を敬うことを行いながらも，Uさんは死の衝撃が持続している．そして，混乱状態が続き，悲嘆プロセスの次の段階に進むことができないでいる．これはJさんと違い，暮らしの中で希望がみいだせないことが一因と考える．Jさんは新たな家族の誕生が希望につながっているが，Uさんにはそのような状況がないこと，それに以前の様な生活にいつ復帰できるか分からないことは，将来への見通しや希望の光が見えず，悲しみの中に止まっている状況と判断できる．

日本では，遺族が死の悲しみから回復する過程について，死後の儀式である初七日，四十九日，1年の法事を行うことを通して，悲しみを緩和することにつながると言われている[15]．スリランカでも死後1週間目，3ヵ月，1年に日本と同様の行事がある．この時には寺に行き，僧侶の説教を聴き，自らの気持ちを落ち着かせるという．また寺にいろいろな食べ物を持参し，僧侶に食べてもらうことによって，死者への供養を行うという．仏教徒である2人とも頻回に寺を訪問しているが，Jさんは，僧侶に食べ物をもって行くだけの金のなさを悲しんでいる．しかし，Jさんは供物や布施が十分できないが，寺に参拝することにより悲しみを軽減する一助となっている．一方Uさんは，持参物の有無に関わらず寺を訪れ，僧侶の話を傾聴している．しかし，死者への供養により悲しみの軽減にはなっているが，母親を思い出す悲しみから抜け出すことができないでいる．しかし，2人とも信仰は喪失の悲しみを軽減する一因となっていると考えることができる．

さらに，近所の人々も死者について語る機会をつくっており，遺族にとってカタルシスの機会となっている．このように近所の人びとが精神的に悲しみを共有する状況は，JさんとUさんの悲しみを緩和する支援となっている．

以上より，JさんとUさんにおける肉親の死別体験からの悲しみの軽減には，BUDDHAへの信仰や地区の人びとからの精神的なサポート，生活の中の希望などが要因となっていることが明らかとなった．

結　論

被災後6ヵ月経過したイレーゴラ地区で生活の全てを失い，さらに肉親までも失ったJさん・Uさんは，死別体験による悲しみをもちながらも，懸命に日常生活を送っていた．この2人からの聞き取り調査から，以下のことが明らかとなった．

1．近所の人びとの精神的な支援
2．信仰をもち，宗教的儀式や儀礼を行うこと
3．新たな生命の誕生による将来への希望

以上が，突然の肉親の死による悲嘆からの回復に影響していると考えられた．

なお，本調査は日本医師会感染症危機管理対策委員会からの委託研究で行ったものの一部である．

文　献

1）西巻滋，横田俊平：短期入院の後に亡くなった児の家族への精神的サポートの検討（第１報），日本小児科学会雑誌，108(11)，1404-1408，2004.

2）山上貴史，中山寛：乳幼児突然死症候群（SIDS）にて子どもを亡くされた母親のグリーフケアの経験，高知市医師会医学雑誌，９（１），118-121，2004.

3）田上克男：いのちをいつくしむ医療を求めて－遺族が求めるグリーフケア，16（９），819-824，2003.

4）蓮井千恵子，北村俊則：事故などで急死した子の遺族のサポート，緩和医療学，４（３），222-227，2002.

5）岡田明子，小林ひとみ，中村三和子　他：わが子との死別を体験した母親のグリーフワーク，精神科看護，139，56-61，2004.

6）瀬藤乃理子，丸山総一郎：子どもの死別と遺された家族のグリーフケア，心身医学，44（６），395-405，2004.

7）小島ひで子：子ども時代の親との死別後の悲嘆とソーシャルサポート，臨床死生学，９（１），17-24，2004.

8）谷川朋子，小泉千賀子，池田智子　他：死別後の家族における悲嘆の回復過程の分析，日本看護学会論文集第32回成人看護Ⅱ，230-232，2001.

9）斎藤恭子，亀田順子，原敬子：CPA 患者の家族援助－事例を通して看護介入を考える，鶴岡市立荘内病院医学雑誌，11，85-90，2000.

10）中西陽子，青山みどり，奥村亮子　他：未告知の在宅ターミナル患者を介護する家族の心理を支える看護－在宅で死を迎えたがん患者の遺族への面接から，日本看護学会論文集33回成人看護Ⅱ，389-391，2003.

11）斎藤水誉，河口てる子，松田悦子：短期間に病院で死を迎えた高齢者の息子の心理，日本看護学会論文集33回老人看護，121-123，2003.

12）近藤裕子，波川京子，山本加奈子　他：スマトラ沖大地震・インド洋津波６カ月後の被災地調査－スリランカのアンバランゴダ地区の現状－，The Journal of Nursing Investigation，４（１），1-5，2005.

13）http//www : who.org.jp.

14）朝日新聞2005年６月25日

15）河野博臣：末期患者の心理，看護 Mook 3 ターミナルケア，金原出版，15，1983.

Analysis of factors in the process of healing sadness in those who experienced the sudden death of relatives -interviews with the families of victims of the Sumatra earthquake and Indian Ocean tsunami-

Hiroko Kondo[1], *Kyoko Namikawa*[2], *Kanako Yamamoto*[3], *Tomoko Abe*[4], *Masahisa Oori*[5], *Osamu Kunii*[6], *Toshihiro Koga*[7], *Seiichi Bessho*[8], *Kazuhiko Moji*[6], *Nobuyuki Nishikiori*[6], *and Shigeru Hirose*[9]

[1] *Mejor in Nursing, School of Health Sciences, The University of Tokushima, Tokushima,Japan*
[2] *Sapporo Medical University, School of Health Scienses, Department Nursing, Sapporo,Japan*
[3] *Aomori University of Health and Welfare, Aomori, Japan*
[4] *Nagasaki University, Nagasaki, Japan*
[5] *Japan Medical Associatino, Tokyo, Japan*
[6] *Research Center for Tropical Infectious Diseases, Nagasaki University, Institute of Tropical Medicine, Nagasaki, Japan*
[7] *Japan Overseas Health Administration Center, Yokohama, Japan*
[8] *Japan Overseas Medical Fund, Tokyo, Japan*
[9] *Oori Hospital, Kanagawa, Japan*

Abstract Two families that experienced the sudden death of relatives in the Sumatra earthquake and Indian Ocean tsunami were interviewed, and the kinds of factors in the process of healing that sadness were analysed. As a result, it was discovered that, given the devoutly Buddhist nature of the area, the two families' faith worked to relieve their sadness. There was also psychological support from neighbours and hope for the future embodied in the birth of children, which were also factors in healing their sadness.

Key words : Sumatra earthquake and Indian Ocean tsunami, experienced the sudden death of relatives, sadness, healing process, interview